

第 71 回全国男鹿駅伝競走大会

【出場結果】

実施日 : 6 月 29 日 (土) 8 時 50 分スタート

コース : 男鹿総合運動公園～椿漁港～加茂(桜島駐車場)～戸賀出張所～八望台～入道崎
～北浦(ニコット)～男鹿総合運動公園

総距離 : 7 区間 66. 2 km

成績 : 3 時間 31 分 6 秒 1/32 位

出場者・リザルト	: 1 区 14. 9 km	親崎 達朗	2/32 位	46'00"
	2 区 11. 8 km	坪井 響己	2/32 位	38'43"
	3 区 7. 5 km	三浦 剛	1/32 位	23'02" (区間タイ記録)
	4 区 8. 8 km	西沢 晃祐	2/32 位	14'41"
	5 区 8. 2 km	田中 龍誠	3/32 位	25'00"
	6 区 9. 9 km	関口 大樹	1/32 位	31'35" (区間賞)
	7 区 10. 1 km	小野 修平	1/32 位	32'02" (区間賞)

【レポート】

1952 年に第 1 回大会を開催してから実に 71 回の歴史を刻む男鹿駅伝競走大会ですが、男鹿半島の風光明媚な景色とは裏腹に、急な勾配が続くコースは全国で開催される駅伝大会の中でも、難易度が高く、選手達には速さより強さが求められる大会となり、当社も 5 年振りの出場となりますが、11 月 3 日に行われる東日本実業団駅伝の前哨戦として「優勝」を狙ってレースに臨みました。

朝から強い日差しが照り付ける厳しいコンディションとなりましたが、午前 8 時 50 分に大学の部 8 チーム、一般の部 32 チームが男鹿総合運動公園を一齐にスタートしました。



これぞ男鹿駅伝という暑さの中、大学の部・一般の部の選手が一齐にスタート！

1区は昨年より1.5km距離が伸びて14.9kmとなり、全区間で最長区間となりますが、当社は前回の大会でも1区で好走を見せた親崎を起用しました。

序盤から青山学院大学・中央大学・東京国際大学・東洋大学といった箱根駅伝の常連校の選手が先頭集団を形成する中、親崎は少し後方の位置でレースを進めました。中盤以降は先頭集団と距離が若干開きましたが、親崎の軽快なピッチは変わらず粘りのある走りを見せてくれました。

順位としては、大学のチームに最後まで食らいついた一般の部のチームと約1分の差が開き、一般の部2位で2区の坪井に襷を渡しました。



1区 親崎選手

2区は1区よりも短い11.8kmの距離ですが、急勾配が続く全区間で最もタフなコースであり、各チームともエース級の選手を起用する傾向があります。

当社も直前に脚の痛みを訴え、多少の不安はありましたが、力のある坪井を起用しました。

坪井は親崎から襷を受けると、海岸線の平坦なコースを勢いよく走りだし、3km過ぎから始まる急勾配の登り坂に入ると、序盤は走りのリズムを合わせられず、苦しい走りとなりましたが、徐々に身体が急勾配の坂に慣れて中盤以降は走りのリズムを取り戻してコース最高地点まで登り切り、その後は急な下り坂が続くジェットコースターのようなコースで、登りで苦戦した分、下り坂では力強い走りが蘇り、スタートでは1分の開きがあった一般の部の先頭チームとの差を23秒差まで縮める区間2位の走りで、新人の三浦に襷を渡しました。



2 区 坪井選手

3 区は序盤こそ登り坂が続きますが、中盤以降は急な下り坂が続き、2 区同様にタフなコースとなり、最近の練習ではチームで一番元気のある走りを見せていた新人の三浦を起用しました。

三浦は、長距離選手としてはがっしりとした体形で、身体の軸がしっかりとしているため、苦しくなっても身体がブレず、後半も一定のリズムでピッチを刻むことが出来る選手です。

前半の急勾配の登り坂を力強いフォームで勢いよく走り抜き、一般の部で先頭を走るチームをあっという間に抜き去りました。中盤以降の下り坂に入っても勢いは衰えず、パワーのある走りで走破し、後方のチームとは約 1 分差をつける区間タイ記録をマークする好走を見せて、4 区の西沢に襷を繋ぎました。



3 区 三浦選手

4区は3.8kmと、この駅伝で最短区間となりますが、急勾配の登り坂がコースの大部分を占める特殊なコースとなります。4区には久しぶりのレース出場となった西沢を起用しました。

西沢は2年前の東日本実業団駅伝に出走後、故障・体調不良を繰り返し、レースに出場する機会に恵まれませんでした。今年は陸上人生を懸けて、減量・メディカルトレーニングを見直して、今回の出走に間に合わせました。

久しぶりのレース感覚を確かめながら、序盤こそ急勾配の坂に苦しめられたものの、最後まで懸命に身体を前に進めて、区間2位の走りで5区の田中に襷を繋ぎました。



4区 西沢選手



5区 田中選手

5区は4区のコースを一部折り返すため、後半まで急勾配の下り坂が続くコースとなります。

5区には本来は登り坂を得意とする田中を起用し、コース適性から、最後まで区間配置を悩みましたが、練習の調子や他の選手との区間配置のバランスを考慮して5区の起用を決めました。

田中は下り坂もブレーキをかけないスムーズな走りでピッチを刻み、最後まで安定感のある走りは変わらず、2位を走るチームとは更に距離を広げて6区の関口に襷を繋ぎました。

走りのリズムの良さから区間賞を取ったかに思えましたが、下り坂が得意な選手が多く走るコースの特性上もあって区間3位に留まり、あらためて区間配置の難しさを再認識させられることとなりました。

6区はロードでの走りに強さを見せる関口を起用しました。

中盤までは小さな身体が大きく見える程、ストライドの大きい安定したフォームで走っていましたが、小刻みな勾配が続く中盤以降に身体がブレだと軽い熱中症のような状態となり、ペースが落ち込んだものの、何とか持ちこたえて、最後は強烈な登り坂をラストスパートで駆け上がり、7区アンカーの小野に襷を繋ぎました。

途中ペースの落ち込みはありましたが、最後は意地を見せて区間賞の走りとなりました。



6区 関口選手

7区アンカーに起用した小野は、春先こそ故障で出遅れていましたが、計画的に800km/月の走り込みを黙々と行い、男鹿駅伝に目標を定めて力を蓄えてきました。

直前に行ったロードでのポイント練習も、設定したペースで確実にこなしていたため、自信を持ってアンカーに起用しました。

スタート直後は少し硬さが見えましたが、中盤以降は腰高でストライドのある走りで、冷静にピッチを刻み、終盤の登り坂で若干タイムを落とす場面もありましたが、見事区間賞の走りで仲間の待つゴールへ飛び込みました。





7区 小野選手



5年振り！一般の部「優勝」のテープを切る小野選手



【総 括】

5年振りに一般の部で「優勝」を飾ることが出来ましたが、その裏では秋田県で開催される大会ということもあり、当社の半導体マザー工場である秋田新電元の方々に全面的なサポートを頂き、スタッフ・選手共に安心して駅伝に集中することが出来たことが勝因の一つに挙げられます。

コロナ禍を経て、オンラインでのビジネス化が進む中ですが、対面でのコミュニケーションが乏しくなる中、陸上競技というスポーツを通じて、お互いの気持ちを理解しながら、苦しみや、喜びを共有し、新電元グループの一体感を感じることが出来たことは、とても大切なことだと、あらためて感じる事が出来ました。

当日、現地応援を頂いた田中社長、堀口専務、秋田新電元の皆さま、私設応援団の皆さま、この場をお借りして、あらためてお礼申し上げます。

チームの課題としては、今回一般の部では「優勝」をすることが出来ましたが、大学の部とは差を開けられてしまった現実があります。

今回の駅伝で浮彫りになった課題をしっかりと克服して、11月3日に行われる東日本実業団駅伝では、東日本実業団連盟に所属する強化実業団チームに挑んでいきたいと思いをします。

引き続き皆さまの温かいご支援、ご協力の程、何卒宜しくお願い致します。

以 上

写真提供：新電元工業株式会社

坂本千夏様、佐藤圭一様